

ブラジルにおける宗教研究と 文化的アイデンティティの探求 (II)

—— 中南米文化史に関する覚書 ——

荒 井 芳 廣

A Search for Cultural Identity & Religious Studies in Brazil (II)

—— Some Remarks on South-American Cultural History ——

Yoshihiro ARAI

Abstract

In this paper, the writer presents the concept 'religious field' using by some reseachers in order to describe the complicate situation of Brazilian religions. Then some principal religions appeared in these religious fields are briefly commented.

はじめに

前稿では、ブラジルにおける宗教研究の前提として宗教と人種の地理的分布を概観した後、宗教研究史の時期区分とそのうちの第一期(1900-1930)における宗教研究の概略を述べた。本来の進行からすれば、本稿では1930年以降の各時期についての記述がなされるべきであるが、「覚書」という副題に免じて溯って2節への補足としてブラジルにおける「宗教場」について簡単に述べて置きたい。すなわち、ブラジル宗教史においてどのような種類の宗教が存在し、それら個々の宗教現象が互いにどのような関係を形成してきたかということを明らかにしておきたい。これは前稿の表2に対する補足であると同時に3節以降の論述をより良く理解していただくための補足でもある。しかし本来はこの論稿の最後に位置すべきである。なぜなら論文全体の主題はあくまで宗教研究の歴史であり、個々の宗教現象は、宗教研究の各時期において研究対象として現われる限りにおいて、それらに対する研究者の視点や研究対象としての歴史的意味を論ぜられるべきであるからである。また本稿で示すような「宗教場」に

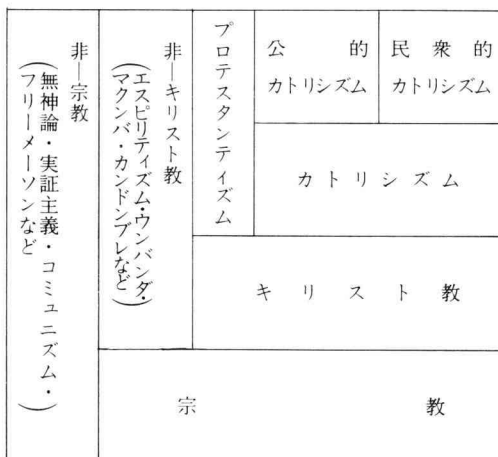
よる宗教的状況の把握は現時点における宗教史的認識あるいは民族誌的認識のあり方を示しているにすぎないからである。さらに具体的に言えば、筆者にとっては、各宗教現象の記述は、ごく最近の時期に属する諸業績を参照することによってはじめて可能であった。これは「宗教史」と「宗教研究史」という二つの異なった歴史記述のジャンルのあいだの差違から生ずる諸問題への考察へとわれわれを導くが、この問題については続稿において1970年における「宗教史」改訂の時期を論ずるさいに言及する。

2-1 ブラジルにおける宗教場の構成

「宗教場」というのは、ある特定の宗教的な立場にとって、いかなる種類の宗教現象が所与であり、さらにそれらの宗教現象がいかなる仕方に関連しあうかということについての主観的な布置のことである。従ってある時点における宗教場というのは、その時点において存在する宗教の数だけ存在しうる。前稿の表2に対する説明において示したように、ブラジルの宗教状況を示す客観的な指標と思われる宗教統計がすでに、暗黙のうちにカトリシズムを公式の宗教とみなす立場から作成されている。もしそれがあくまで客観性を装

おうとするならば虚偽であるが、「宗教場」に関する社会学的研究という視点からは、この偏向自体が一個の宗教的事実である。筆者自身別稿¹⁾において、ブラジル北東部に流布する民衆本、リテラトゥーラ・デ・コルデルを支える宗教的イデオロギーである民衆的カトリシズムを説明するために、この宗教的立場からの「宗教場」の構成を図1のように分析した。

図1. リテラトゥーラ・デ・コルデルの背後にある宗教場



この図は構造言語学の成分分析の方法を借用して、民衆カトリシズムの立場からの「宗教場」、すなわち民衆的カトリシズムと他の諸宗教との差違と対立の構造を図示したものである。いわば民衆的カトリシズムの外延的な定義である。ただしこの図は、リテラトゥーラ・デ・コルデルを支える宗教的イデオロギーとしての民衆的カトリシズムを説明するために作成されたものであるから、この宗教場の存立する基盤として筆者が想定したのは、地理的にはブラジル北東部、時間的には、小冊子の発生した19世紀後半から現在までとかなり広汎な時空である。従ってこの宗教場には、民衆的カトリシズムと他の諸宗教とのあいだで生起した数多くの歴史的事実が前提とされ、前記別稿では、具体的な事件を例にとりながら、民衆的カトリシズムと諸宗教の関係を説明した。本稿では、重複を避け、個々の歴史的事実には触れず、この図自体について詳しく述べよう。

民衆的カトリシズムの信者は、一般に広くカトリシズムの信者とみなされている。前稿で言及したM・ケ

リーノの民俗宗教あるいはダ・クーニャのメシアニズム研究はすでに前者を研究対象としていたが、それらの宗教現象が、「民衆的カトリシズム」という概念のもとに公的なカトリシズムと区別された一個の宗教形態として意識されるには、1930年代のG・フレイレの業績、1950年代の人類学者(主として外国人)の業績を待たなければならなかった。その信仰形態において、カトリシズムという宗教的コミュニケーションの送り手である「教会」が信者に対し提示する「公的」なカトリシズムと、受け手であるブラジル民衆が実践する「民衆的」なカトリシズムは異なった形態をもっている。事実、ブラジルのカトリシズムの歴史には、この二つの形態のあいだの葛藤や対立を示す状況あるいは事件が数多く観察される。例えば、メシアニズムの運動は、ついに公的なカトリシズムと物理的対立を生ずるまで至った民衆的カトリシズムの急進的な形態であると考えることができる。ところが別の側面では、この二つの宗教形態は、「カトリシズム」一般として共通に、他の宗教形態(プロテスタンティズムや実証主義など)あるいは他のイデオロギー形態(共産主義や無神論)と対立する。1960年代の後半から1970年代にかけて登場し、現在も継続中のブラジル・カトリシズム史改訂の作業²⁾はこうした事実を踏まえた上で、両者を含んだ「カトリシズム」のより包括的な定義のもとに進められている。また図のなかでは「実証主義」は、「非宗教」として分類されているが、ブラジルにおける実証主義は、清水幾太郎の報告³⁾にもあるように、自ら主張するところにおいても、また客観的にも、教義、教会の建物、そして信者組織を備えた一個の宗教である。

このようにブラジルにおける宗教現象の図のような「宗教場」による分類法は、客観的あるいは中立的な分類法をめざしたものではない。つまり異なった宗教的立場からすれば同じ宗教的諸現象が異なった構成のなかに布置される。

現代ブラジルの宗教学者、C・R・ブランダン⁴⁾は、サンパウロ郊外の農村、モンテ・モールでのフィールド調査(1976—77)に基づいて、このコミュニティの宗教場を再構成している⁴⁾が、こうした研究の意図を次のように述べている⁵⁾。

「……ブラジルのあるコミュニティの宗教生活に関する、支配的宗教、カトリシズムの観点からの民族誌的研究が問題とされているのではない。…反対に私は自分を、モンテ・モールの諸宗教および諸教会のあいだにある諸関係の体系の内部で、(それら諸宗

教すべてから) 等距離にある地点に身を置くよう努めた。そうすることにより、モンテ・モールの諸宗教および諸教会が形成する関係の重要な側面のいくつか——具体的な宗教場の構成社会階級と宗教制度のあいだにある関係の体系の現在の編成、ある種の俗信徒および宗教的エージェントの諸利害が並立という状況における宗教的イデオロギーの象徴的生産のための諸手段——を説明しようと試みた。」

「支配的宗教」の観点からすべての宗教から等距離にある地点への移行。ブランダンによる宗教の民族誌的研究は、ブラジルにおける宗教研究の一つの到達点と評価できるが、この研究の特徴あるいはメリットは次の3点に要約できる。すなわち、(1) 民族誌的記述という方法により、村落という小さな空間的単位であるが、「宗教的状况の現在」を詳細に把握することができた。

(2) 人々は唯一無二の宗教的リアリティを生活しているのではなく、「多元的な宗教的リアリティ」が存在するというを示し、(3) それらの多元的な宗教的リアリティの類型化を試みることにによりそれらのあいだの「比較」を可能にした。

民衆的小冊子の宗教的イデオロギーの背後にある「宗教場」を図示した図1と対照する意味で、ブランダンによる宗教場の図式を図2に引用する⁶⁾。

モンテ・モールには、教会のレベルでいうと、カトリック(1)、プロテスタント(6)、エスピリスト(1)という3つのカテゴリーの宗教が存在する。6つのプロテスタント教会のうち、3つはペンテコティズムの教会、あとの3つは伝統的なセクトであって図2にあるようにプロテスタントの内部では、これらは二つの下位区分を構成している。前記の公的カトリシズムと民衆的

図2. モンテ・モールにおける宗教場の比較 (Brandão 1979より)

カトリック版	キリスト教	非キリスト教		
	カトリシズム (正統的キリスト教) プロテスタンティズム ペンテコティズム (非正統的キリスト教)	エスピリティズム ウンバンダ		
プロテスタント版	福音主義的キリスト教	非福音主義的キリスト教	非キリスト教	
	プロテスタンティズム (正統的キリスト教) ペンティコティズム (不十分なキリスト教)	カトリシズム (非正統的キリスト教)	エスピリティズム ウンバンダ	
ペンテコティスト版	ペンテコティズム的 キリスト教	福音主義的キリスト教	非福音主義的キリスト教	非キリスト教
	ペンテコティズム (正統的キリスト教)	プロテスタンティズム (不十分なキリスト教)	カトリシズム (非正統的キリスト教)	エスピリティズム ウンバンダ
エスピリスト版	<p>より進化した宗教 進化の度合の低い宗教</p> <p style="text-align: center;">エスピリティズム ← ペンテコティズム ← カトリシズム ← ウンバンダ</p> <p style="text-align: center;">(完全に進化した宗教) (進化の程度 の低い宗教) (後進的な 宗教) (呪術)</p>			

カトリシズムは、共同体のレベルでは聖職者と俗信徒の区別として現われるが、他の宗教との関係においては異なるものとは意識されていない。キリスト教系の宗教からは霊媒を用いる宗教として同じカテゴリーに分類されるエスピリティズムとウンパンダのうち、後者はモンテ・モールには集会所をもっていないが近隣の町村には存在し、いずれの宗派もこれを意識していることがわかる。

ブランダンによるモンテ・モールの宗教場の図式化、すなわち図2から我々が読みとることができる事柄をいくつかを挙げてみよう。

(1) キリスト教内部においては、ブラジルの宗教史において後から登場したものの宗派ほど自らを他の宗派と厳しく区別し、また他の宗派についても細かく分類している。

(2) 1970年代後半のブラジルにおける小さなコミュニティにおける宗教状況のなかに、プロテスタンティズム、とりわけペンテコティズムのめざましい発展という、近年のブラジルそして中南米全体に観察されるマクロな宗教状況が反映されている。

(3) エスピリティズムの信徒による宗教分類には、各宗教の信者の属する階層や教義およびそれを受容する側の知的程度が反映されている。この事実を理解するには各宗派の教義についてある程度の予備知識が必要であるが、他の宗派は「霊媒宗教」として同じカテゴリーに分類している⁷⁾ウンパンダを最も遠いところに位置づけ、そのあいだにペンテコティズム・プロテスタンティズムとカトリシズムを置いている。これはエスピリティズムの教義の偽・科学的性格に由来すると思われる。すなわちこれを受容する信者にはかなりの教育程度が要求される。事実、エスピリティズムはブラジルにおいて中流以上の社会層にその勢力を伸しており、これに対し、ウンパンダは知的あるいは社会的に比較的低い階層において受容され、「低いエスピリティズム」(espiritismo baixo)と呼ばれることもある。

(2)および(3)の事実およびこれに対する解釈は、宗教研究史を理解するためにブラジルの宗教状況を概括的に把握するという本稿の目的を越え、後節で扱う1970年代以降の宗教研究史として論じるべき課題である。ここではこれ以上深入りせず、次に「宗教場」のなかに現われた諸宗教について簡単な註釈を加えておこう。

2-2 ブラジルにおける主なる宗教

1° カトリシズム

他の中南米諸国と同様、ブラジルは植民宗主国ポルトガルによってカトリシズムを公的宗教とすることを余儀なくされた。現在でも国民の大半はカトリック教徒であり、カトリシズムの伝統は堅固である。しかしながら、その長い歴史のなかでカトリシズム自体がその歴史的環境に応じさまざまな変化してきており、また数多くの宗教研究者がブラジル・カトリシズムの分類を試みているように種々のヴァリエーションを生んでいる。前記のようにこの宗教の送り手の側である教会自体が、ポルトガル以来の伝統である「パドロード」(Padroado)すなわち国王が教会の保護者であった、国家と教会がほぼ一体であった時代から、カトリシズムのローマ化政策を背景とした19世紀後半の「宗教問題」と呼ばれた事件などをきっかけとして国家と教会が分離し始め、社会主義的傾向をもつカトリシズム急進派と政府との対立に象徴される現代の状況へと変化してきている。信者の信仰形態も、都市部と農村部とでは伝統的に異なった形態をもち、さらにメシアニズムや草の根キリスト教共同体の運動など新しい現実に対応する形態のカトリシズムを生み出している。

2° プロテスタンティズム

ブラジルにおけるプロテスタンティズムは主として19世紀におけるアングロ・サクソン系およびドイツ系移民によって南部の諸州に導入された。従ってルター派の教会が多かったが、19世紀の後半になると、北米の宣教師によって長老派あるいはバプティストなどの宗派(denominations)が導入され、盛んに福音伝道が行なわれた。20世紀の初頭には各地でペンテコスタル系の宗派(Assembléia de Deus, Congregação Cristã do Brasilなど)が設立される。移民によって導入され、主としてその子孫によって受け継がれてきた宗派は「移民のプロテスタンティズム」と呼ばれることがある⁸⁾、これらの宗派は移民の増加とともに勢力を伸ばした。これに対し他の宗派はその信者が他の宗教からの回心によって入信することになるので「回心のプロテスタンティズム」と呼ばれ、前稿の表2にあるように着実に勢力を伸ばしている。とりわけペンテコスタル系の宗派の近年の伸展はめざましく、例えば、サンパウロ州における非ペンテコスタル系のプロテスタントの1956年から1961年の5年間の伸びが、10%強で

あるのに対し、ペンテコスタル系の伸びは60%強となっている⁹⁾。こうした成長の要因としてブラジル社会の都市化および産業化が挙げられているが、現代ブラジルの宗教社会学的研究の重要な研究課題であると同時に、マックス・ウェーバー以来探究され続けてきた宗教倫理と経済行動の関係についてのモデルの再検証、さらに社会発展と宗教倫理との相関といったマクロの問題など社会学一般にとって研究価値の高い課題となっている。

3° エスピリチスモ

今日ブラジルで「エスピリチスモ」と呼ばれているもののなかには、種々様々な形態と内容をもったグループが含まれている。霊的存在についての小さな研究サークルからプロテスタントの宗派に類似した組織と集会の形態をもつものまで、また内容的にもインドの神秘思想からヨガ、道教、禅などの東洋思想、錬金術、占星術などを含む西洋のあらゆる種類の神秘思想がそれぞれのグループによって様々に組み合わされている。そのなかで代表的なものがカルデシスモである。「カルデシスモ」は、19世紀フランスの心霊学者アラン・カルデック（本名 Léon Hyppolite Dénizart Rivail）がその著『精霊の書』(Livres des Esprits, 1853)において展開した霊魂についての理論に基づいた宗教運動である。カルデックの思想は、すでに19世紀中葉にブラジルに移入され、1860年代から1870年代にかけて最初期のエスピリスタの組織が設立された。現在では、前稿の表2にあるようにその信奉者の数は決して無視することができなくなっている。エスピリチスモの隆盛という現象は中南米全域に観察される事象で、中南米人の心性を理解するうえで重要な鍵となると思われるが、ブラジルにおけるエスピリチスモの展開の独自性を探すならば、ウンパンダと呼ばれる比較的新しい信仰形態の創成に与えた影響は重要であろう。

4° ウンパンダとアフリカ系セクト

ウンパンダは、ペンテコティズムとともに近年その信者数の増加のめざましい宗教であり、比較的新しい、というより現在も形成途上にある宗教である。「形成途上」という性格は若い宗教だという事実に由来するというよりむしろその教義における包容力の大きさに由来するものと思われる。ウンパンダは、マクンバ、カンドンブレなどのアフリカ系憑依宗教、エスピリチスモ、カトリシズム、インディオの信仰など、いわばブラジルに存在するほとんどの宗教の要素を混淆した

シンクレティズムである。この点において自宗派と他の宗派・宗教とを峻別するペンテコティズムと対照的である。シンクレティズムという側面において、マクンバやカンドンブレなどのアフリカ系の諸セクトも、アフリカの部族宗教の要素、カトリシズムの要素、インディオの信仰の要素を混合しており、ウンパンダの先行形態として、現在も大きな勢力をもっている。その意味でウンパンダはアフリカ系憑依宗教の発展の一形態ともいえるが、両者を区別しているのは、後者が教義の上では白人・アフリカ系住民・インディオの要素を混合しながら、信者層はアフリカ系住民にほぼ限定されているのに対し、ウンパンダは信者のレベルにおいても様々な人種を混合しているという点である。一方、ウンパンダはエスピリチスモの一変種、すなわち白人起原の宗教の黒人化として見る別の観点もある。同じ事実を前にした二つの解釈の背後にある価値感の相違は、この宗教の発展の背後にある社会変化と関連していると思われる。

以上、簡単に現代ブラジルの主な宗教について概観してきたが、カトリシズムの新しい展開、ペンテコティズムやウンパンダの急成長、エスピリチスモの隆盛、それらはすべて、それぞれ違った意味でブラジルという比較的新しい国が植民宗主国あるいはヨーロッパへの文化的依存を脱して自分独自のものを求め始めているということの顕われである。そうした現象を研究対象とすることによってブラジルの宗教研究者たちが求めているのも、ブラジルという国は一体どのような国なのかという問い、すなわち文化的なアイデンティティの探求なのである。この探求のあとを辿りながら、ブラジルにおける文化的アイデンティティ探求の歴史を明らかにするというのが前稿の3-1および続稿の主題である（未完、以下次号）。

註

- 1) 拙稿、「民衆の小冊子におけるメシアニズム—ブラジル北東部の宗教的イデオロギー」、中牧弘允編『神々の相克—文化接触と土着主義』、新泉社、昭和57年、197頁。
- 2) その例として Eduardo Hornaert の次のような業績が挙げられる。 *Verdadeira e Falsa Religião no Nordeste*, Ed. Beneditina Ltda., 1972. および *Formação do Catolicismo Brasileiro. 1550-1800.*, Ed. Vozes. 1978.

- 3) 前記, 『昨日の旅』, 文藝春秋社, 昭和 52 年.
- 4) Carlos Rodrigues Brandão, Religion et Idéologie Religieuse à Monte Mor, *Arch. Sc. soc. des Rel.*, 1979, 47/1, pp. 91-121 および *Os Deuses do Povo*, livraria Brasiliense ed. 1980.
- 5) Brandão (1979), p. 91.
- 6) Brandão (1979), p. 116.
- 7) この種の宗教のあいだある連続性については拙稿, 「憑依宗教における伝統と革新—アフロ・アメリカン宗教の一断面—」, 宗教社会学会研究会編, 『現代宗教への視角』, 雄山閣, 昭和 54 年, pp. 210-222 を参照.
- 8) Cândido Procópio Ferreira de Camargo ed., *Católicos, Protestantes, Espíritas*, ed. Vozes. 1973, pp. 105-158.
- 9) 同上, p. 21.